昭和29年9月25日
第三種郵便物認可

昭和35年(1960)1月1日 (金)

みいけ附録

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町
新年特集号

山積する激励の手紙

南から北から仲間の声

闘いの中で新年を迎え、われわれは「団結モチ」を食べて闘魂を燃え立たせているが、年末にかけて全国の仲間たちからの激励の手紙は、あいかわらずひっきりなしに殺到している。高知、岐阜、千葉とほとんど全国にまたがっており、一読ごとに感激もあらたに、肚の底から闘う闘志が湧いてくるのをどうすることもできない。

団結の喜びを

炭労のみなさん!!

寒い冬がやってまいりました。みなさん方の偉大な闘争をテレビ・ラジオ・新聞などで見聞するにつけ、これからの寒さにますます苦しい闘いをつづけられることに同じ労働者として、資本家に搾取される仲間として、いきどおりを感じずにはいられません。

私たち全農林青年婦人部員も、きのうまでの安保阻止第九次統一闘争まで、みなさん方に負けない気持ちで、また励まされる気持ちで闘ってまいりました。

こんど、ますますきびしくなる弾圧にたいしても、またそうありたいと思っています。

どうかみなさん、最後まで頑張ってください。先頭にたって闘いをつづけられるみなさん方にたいする風当りは、私たちの想像以上に激しいことでしょうが、私たちはぎっと、みなさん方のうえにピッタリとくっついて闘いをすすめます。

この慰問袋は、何ひとつ立派なものはないかもしれません。しかし、私たち青年婦人部員が真心をこめたものばかりです。「もっともっとみなさん方にいろいろご協力したい」とおおくの部員も申しております。

なにかのお役にたてば、このうえないよろこびです。

全農林労組高知県本部
青婦部長 立山 準

団結を強めよう

はげしいあらしの中で闘っている三池のみなさん!!

同じ働く労働者として「うたごえ」を愛する仲間として、遠い岐阜の地から「がんばってください」とさけびます。

ヤマの闘いがその鉱山ひとつの闘いではないことを考えますと、はなれていつた仲間を、ほんとうに悲しく思います。

かんたんに、エネルギー革命だからという冷いマス・コミの中で誠意ある人びとは〝黒い羽根〟運動をはじめました。

しかし、それがどうなるというのでしょうか?

問題をそんなことに、はぐらしてしまうことはできません。最初私もそうした行為を無条件に認めておりましたが、それを訂正しなくてはならなくなりました。

いま、そしてこれから、私たちのしなければならないことは、この本質を見つめて、考え、行動する仲間の団結をつよめることです

つぶれた、ちいさなヤマの人びとの生活を見るにつけても「人ごろしだ」とさけんだ生産のいきどおりが、そのまま、私の胸にささるようです。

どうか、がんばってください!!

私たちの闘いは、あとからあとからとおこってきますが、たくましい力でのりこえましょう。

そして、一日もはやく〝明るい平和のうた〟がうたえるように…

岐阜ひまわり合唱団
木野 美代子

お役にたつなら

突然のぶしつけをおわび申しあげます。

たいへん少額でお役にたたないかと思いますが、二千円カンパいたします。

日本中の労働者が、国民が、日本一つよい炭労の方がたにおおきな関心をいだいております。

どうか、シツカリがんばってください。みなさんのご健闘をお祈りいたします。

千葉県習志野市
歯科 照子

共に手をとって

炭労のみなさん!! いまだお目にはかかりませんが、企業整備、経済的重圧に日日の闘争はたいへんなことと思います。

私たち新聞労連傘下の者も、日一日と困難になってまいります労働条件下〝新聞を国民のものに〟のスローガンをかかげて闘っております。

九月二十六日、東海地方をおそいました伊勢湾台風は、空前の猛威をふるい、千数百名にのぼる尊い人命をお犠牲にするほどのものでありました。

あれから七十余日、復興もすすみだしました。炭労のみなさんもいろいろな面でご苦労のおおいこととは思いますが、ともに手をたずさえて、明日への復興に、安定した生活をきづくためにがんばりましょう。

この中の物資はささやかではありますが、私たち青婦部員が心をこめたものです。ご笑納くだされば幸いです。

名古屋市中村区柳内
毎日新聞労働組合(中部)
青婦部 一同

こどものために

一面識もない私がお便りをさしあげ、まことに失礼に存じます。

師走にはいり、寒さにもまけず日夜闘争をつづけておられる炭労のみなさま、ご苦労さまでございます。

私も大東亜戦争で夫をなくし、その二人の子供をつれて毎夜のように見舞われるB29の空襲にもまけず、防空ごうにはいつては、いくどか「いまが最後か、いまが最後か?」と生きたここちもなく今日まで生きてきたのです。

終戦前に里に帰りましたが、ふたりの子供をつれた私の生活も、いま闘争をつづけておられる炭労のみなさまとおなじような苦しみがありましたが、その苦しみにもまけてはならないと、イバラのみちもアラシのなかも〝子供のために〟と勝ちぬいてきたのです。

そして昭和二十三年十二月、末娘が四才になつて日本通運KKに入社して今日まで働いてまいりましたが、女の手でふたりの子供を育てていく私には、ひとおりやふたとおりでない苦しみや悲しみが私の身辺をとりまきましたが、その苦しみに〝まけてはならない子供のために!!〟と思つて歯をくいしばつて辛抱してまいりました

私たち全日通労組も、さる二十七日より三日間秋季闘争をつづけてまいりました。

どうかみなさま!!会社の圧力におされることなく、最後までかたならず闘いましょう。勝ちぬくまでがんばつてください。われわれ労働者の仲間とともに、かげながらの力をあわせてご家族の方がたのために、つよく「首切り合理化白紙撤回貫徹」まで闘いぬきましょう。

ご健闘をお祈りいたします。

がんばれ!! がんばれ!!

最後までがんばり通せ!!

大和高田市高田全日通労働組合高田分会
婦人部長 小部さか枝

妥協ない闘いを

前略、われわれ労働者階級の生死を賭けた闘いに日夜の御苦労のほど暑く御礼申し上げるとともに微力な私たちの支援を深くおわび申し上げます。

向寒の折りくれぐれもお体に御注意の上、勝利の日まで妥協なく闘つて下さい。

私たちは今後も条件に恋じた共闘を組むことをお誓い申し上げます。

名古屋市千種区小松町一七
小松寮内
今村よしで

握手!!

各地域で〝団結餅〟

餅米カンパ66俵集まる

三池の仲間に餅米カンパで粘り強く闘つてもらおうと、荒地評・大地評ではカンパ運動を呼びかけていたが十二月二十六日までに総量三千七百九十一・六キロ(約六十六・五俵)が贈られ、早速各地域にわけられ、二十七日粘り強い団結餅がつかれた。

カンパを送つた同志はつぎの通り

【大牟田関係】
三池労組 三鉱労組 合成労組
東圧労組 電化労組 市労連 市教組 華商連 合同労組

【荒尾関係】
市職組 第一紡労組 製網労組
全九労 荒尾運送 全通労組 市交通労組 電通 市教組 国鉄労組 動力労組 有働病院労組 自由労組 坂田市長 助役 収入役 課長会

【その他】
総評 福岡県教組 熊本県評 革新職員団

〔新年の詩〕

怒れる三池

(寄稿)

出海溪也

三池よ
ヤマよ
おまえの千の瞳
おまえの萬の口
を
開け

〈不当解雇状返納デモ〉
広場はおまえの憎しみで埋まり
テレビ・新聞のフラッシュの放列は
巨大な労仂者の塊(マッス)をとらえる
すでに 怒り狂つた人びとが
日本のうえに立ちあがりつつあつた

ヤマよ
三池よ
おまえの千の苦しみ
おまえの萬の憤り
で
うち砕け
また 萬の悲しみを

組織離脱後の製作所

甘言をひるがえした会社

十月二十四日製作支部において二十二名の同志を残して大量脱退が強行され「製作所労働組合」を結成したあと、三十八日間の籠城生活がつづいた。この間、二十二名の同志たちは、有刺鉄線やバリケードをめぐらしたいかめしい構内に、さかさにつるされた三鉱労組々合旗がならべられ、出入を厳重に警戒する警備隊の前を通つて出勤したのだが、職場では安全委員の腕章をつけた職制、鉢巻を腕にまきつけた職組組合員である係長や係員、白地に製作労組と赤く染めた鉢巻をしめた新労組々合員など、文字通り異常なトゲトゲしさの中で働いていた。

二十二名は〝口きかぬ戦術〟やかずかずの差別待遇など、卑劣な会社の攻撃と労働者同士の冷い対立の洗礼をうけたわけだが、三鉱労組々合員・主婦会や大地評をはじめ全国の働く仲間から力強くはげまされてその迫害に耐えぬいてきたのだ。

三井鉱山から分離された新会社、いわゆる株式会社三井三池製作所が発足したのは、十二月一日である。

十二月一日正午から構内トラバサー広場で創立記念式典が行われ、倉山社長、林工場長ほか全従業員が一体となつて新会社をもりたてゆくことを誓い合いその立場にたち企業の隆盛、個人生活の安定という共通の目標に向つて一致協力、あらゆる困難を克服して今日この栄ある独立の日を迎えました。

今後ともこの精神を失わずこの感激を忘れず、我々共同の目標に向つて全員一致まい進するならば、明日の幸福は必ず約束されると思います……。

と、倉山社長の祝辞をうけ(会社新聞〝くろだいや〟より)明日の幸福を約束された新会社、新労組は十二月八日に労協その他五項目を調印する交渉をもち、あわせて越年資金、記念品料について会社の意向を打診し、早く支給するよう要望を出している。ところが会社に祝福されて結成したはずの新労組も、わずか二カ月足らずでその期待をうらぎられたのが、十二月十六日に遂に会社にたいして団体交渉を申入れた。

第一回団体交渉は同日午後二時二十分から五時までつづけられたが会社側は

「皆さんの気持は十分わかるので本店で努力した。御代として一万円、それに千円相当額の記念品を贈る筈で諒解されたい」

と回答し、組合側は

「独立をし、希望に燃いて働いている。それにこたえる会社の誠意はなかつたのか。設備投資だけでなく労働者にも投資をしないのか」

と、反論をして双方対立したまゝ物わかれになつたらしい。

つづいて十二月十八日記念品料を含む越年資金団交をひらいたが、会社は社長や重役と協議したが、越年資金一万円、記念品料千円が努力の限界であると回答し進展はみられなかつたので、組合はこれを不満であると一蹴し、三万円以下では納得出来ぬとして団交を打切つたようだ。

全く例のない話で、新労組は要求を出さずに交渉をしていたらしくその交渉がいきづまつてからはじめて三万円を口頭で要求した様子である。

十二月十九日に再度団交をもつたところ、会社は「三井鉱山と製作所の独立との関係が今つなぎ目という位置にあるから、銀行や金融機関その他の制約があつて出そうにも出せない立場にある」といい組合は「会社の不誠意な態度を追及し、今後一切会社業務に協力出来ぬといつて退場した」と新労組情報(原文のまゝではない)が報じているところをみると、独立式典の日倉山社長がいつた……共通の目標に向つて一致協力あらゆる困難を克服して……今後ともこの精神を失わずこの感激を忘れず……と明日の幸福が約束されていたはずだつたが、やはり資本家が労働者の幸福を保障してくれるという奇蹟はおこるはずはなかつた。

そこで新組合は実力のらづけが必要だということで無記名投票を行い実力行使指令権、妥結権を確立し、決起大会をもつてもりあげることを決定しなければならなかつた。そして、二十三日午前九時には最後回答をだし、二十四日午後の団交で最初の会社回答の一万円支給と千円の記念品のほかに賃付金六千円という条件で解決をみたのだ。

製作所労組情報をもとに新労組結成後初の団交、越年資金問題の経過をさぐつてみたが、七万円、あるいは十万円を支給するという話は分離、脱退騒ぎのあつた十月二十四日以前のP・Rか、または責任の明らかでない風評や憶測によるもので、「とらぬ狸の皮算用」だつたらしい。

機関決定に反し、一部の御用切り幹部らにひきづられて組織の運命をかけた大闘争の最中に戦線を離脱し分離を強行した、新労組組合員も越年手当交渉の経過を通じて、資本家と労働者が同一の目標、同一の立場に立つことが出来ないことを知つたことだろう。

職制が酒の座で話したことや非公式に流された一律金問題などは夢でしかなかつたのだ。会社のP・Rにつられて夢を追つても夢は夢でしかないのだ。

団結こそが労働者にとつてもつとも重要な武器であり、敵の分裂工作に乗ぜられて利益を得ることはないことが、製作所分離後の経過からもはつきりとつかむことが出来る。

いよいよ本格闘争に突入したわれわれは「クビ切り合理化」粉砕のたたかいの勝利のために、悪質な敵の組織分断分裂工作をハネ返えす十分な警戒を強めるとともに、新労組結成に走つた製作所のひとたちにも団結のよびかけを強める必要がある。

なお二十二名の同志たちは企闘の勝利を確信し、その戦列の中で闘つており、三池労組の指令指示によつて行動し、毎週の火・金曜日の夜は地域交流を行つている。